

KAN  
環

空蝉  
第39号

千曲川地域の人と文化を紡ぐ



NPO法人上田図書館倶楽部

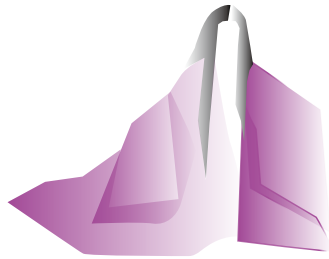
2020年7月

# うつせみ 空蟬

空蟬の身をかへてける木のもとに

なほ人からのなつかしきかな

『源氏物語 第三帖・空蟬』



\*空蟬とは蟬の抜け殻を指し、夏の季語。また、『源氏物語』五十四帖の巻名の一つで、登場する女性の通称でもある。光源氏17歳の夏のこと。女性は源氏の求愛を拒み、一枚の着物を残し立ち去った。名の由来は、抜け殻のような衣にことよせて、源氏が送った和歌による。

もくじ

- 4 連載 千曲川地域と自然災害  
71歳の初挑戦、12日間被災地へ その2……遠藤進
- 8 信濃を旅した文人たち  
久米正雄 く父を想う……海野郁
- 14 ぶらり散策  
森將軍塚古墳……伊藤文字  
信州国際音楽村のバラ……望月聡子
- 18 上田情報ライブラリー開館・NPO法人上田図書館倶楽部  
設立15周年記念 その3  
設立の経過、そのコンセプト、今後の展望……宮下明彦
- 22 波紋  
木曾山林資料館が  
『木曾山林資料館研究紀要・第一号』を発行
- 25 寄稿  
暗闇を守る……やぎかなこ
- 27 あとがき

表紙の写真

青空の下、爽やかな風を受けてドライブへ！ ビーナラインは、美ヶ原から霧ヶ峰高原・車山高原・白樺湖、そして蓼科高原から茅野に抜ける。中でも車山高原は、7月頃からニッコウキスゲが全草原を覆い、可憐な高原植物が次々と咲いて訪れる人を出迎える。

表紙写真・文 矢幡正夫



## 連載 千曲川地域と

### 自然災害

71歳の初挑戦、

12日間被災地へ

元信濃毎日新聞記者

遠藤 進

(四)恥を忍んで、参加者の「思い」を伺う

足元で発生した甚大な被害を座視できなかつた。今やらなくて、いつやるのか。この思いが古稀を過ぎた老体を揺さぶつた。東日本大震災の惨状を目の当たりにした時も心は揺れ動いたが、現役でボラ活動をする余裕はなかつた。自由の身となり初めての挑戦となつ

た12日間のボラ活動。多くの人と出会い、人とのつながりの大切さを思った。

こんな動機から飛び込んだボラ活動だったが、被災者や活動に参加している皆さんの「思い」も知りたかつた。そこで、活動の合間に努めて多くの人に声を掛け、話を伺おうと思つた。聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥。恥も外聞もなく、手製の名刺を渡し「以前こんな仕事をしており、記録として残したいので」と。プライバシーに触れる面もあり、遠慮がちにソフトに伺うなど聞き方には気を使つた。

そんな中のあるエピソード。サ

テライト前広場で自己紹介をしあつていた時のこと。「それボラハラでは」。いきなり女性からパンチを食らつた。胸にドキッと突き刺さる一言。返す言葉はなく「あ、そうか、そう思う人もいるんだ」と胸に納める。女性はやっぱり指摘したようで、周囲は苦笑い。年齢を聞いたのかと思うが記憶は定かでない。東京から来た40代のNさんは、背が高く明るい姉御肌？の女性。「高い場所が大好き」と脚立に上り、フットワークも軽く楽しそうに作業。緊張感も解けていつた。

床板を剥いだ1階で横木の泥を取る作業中、不覚にも床下から足を上げようとして木の角で膝ひざを擦りむき、少し出血した。近くにいたNさんは「ここに座つて」と指示。膝を水で洗つて持参した薬

を塗るなど手際よく処置してくれ  
びつくり。聞けば元看護師とい  
往年の面目躍如だった。看護師に  
は数日前にもサテライトでお世話  
になった。こういう時は本当に頼り  
になる存在。Nさんは、8回目の  
班のムードメーカーとなった。

そして、帰り際、東京で大災害  
が起こった時のことが話題に。心配  
されている首都直下型地震のこと  
だった。「長野から助けにきてくれ  
る？」とNさんに聞かれ、とっさに  
「それは無理」とつれない返事を  
してしまった。班長を務め、ボラ  
活動に一言を持つ川崎市のTさん  
(54)も聞いていたが、何も言わ  
ず笑っていた。せめて「万難を排  
して駆け付けます」と返すべきだっ  
た。長野に応援にきてくれたのに  
礼を失ってしまった。

大都会は苦手で地理にも不案内

のため、混乱時の東京にはとても  
行けないと思い、あのような返事  
になってしまった。

帰り際、Nさんはサテライトの  
赤沼公会堂近くのリンゴ畑で脚立  
に上つて高い所のリンゴを5つ程取  
り、記念にと持ち帰った。泥棒で  
はありませぬ。園主がボランティ  
アのために「ご自由にお取りくだ  
さい」と張り紙をしてある木。私  
も何個かいたっていた。みつがのつ  
ていて甘く水害に遭ったリンゴとは  
思えなかった。蛇足ですがNさん  
は既婚者。新幹線の時間が迫って  
いると飛ぶように帰っていきまし  
た。同じ班になった人だけでなく、  
電車であいさつを交わしたり(ボラ  
活動の服装をしていると、長野駅  
や電車内で何人かに声を掛けられ  
た)昼食時に席が隣になった人にも  
話を伺った。その数さつと百人ほど。

話の取っ掛かりは、「どちらか  
ら?」、「何回目?」というのが共  
通のキーワード。多くの人が同じ  
ように関心を抱いていて、同じ仲  
間同士という意識からか気軽に答  
えてくれた。そして、回を重ねる  
ごとに、顔見知りの人が増え、サ  
テライトでは「どうも」、「またお  
会いしましたね」が、朝のあいさつ  
に。つまり、ボラ活動を何日も続け  
ている人が多数いたのである。次はそ  
んな人をピックアップし、紹介したい。



2019年 11月27日  
長野市長沼・赤沼地区のサテライト  
センター(赤沼公会堂)。  
朝、作業前に社協担当者の説明を聞  
く参加者たち。

## (五) 被災地へ100日

### 「ボランティアおたく」

「長野市に来るまでに、被災地で合計91日間ボランティア活動をしました。今回、長沼地区では10日間活動する予定です」大柄で飾り気のない男性は、送迎のバスを降り、赤沼の被災地に向かう道すがら話し出した。少し照れた表情ながら、自信がのぞく話しぶりだった。91日間1。のつけから度肝を抜く数字の披露。驚きと同時に、一体どういう人、何の仕事をしているのだろうか。と、次々と興味があいた。間もなく、あ、そうか、この人、まさしく「ボランティアおたく」なんだと思った。冷やかして言ったのではありません。5回目で一緒の班になった愛知県愛西市あいさいの男性Kさん(50)が、その人

保険代理店を営んでいるという。ボランティア活動を開始したのは、阪神淡路大震災(1995年1月)がきっかけ。以来、大きな災害が起きるたびに被災地に駆けつけた。東日本大震災、熊本地震、そして長野以上の水害に見舞われた岡山県倉敷市真備町など。今回、長沼地区の10日間を合わせると、100日間の大台を記録する。

帰りの道すがら取材を続け、活動の動機を尋ねる。「なぜ、そこまでやるの?」と話しを向けると、しばし沈黙。そして、吐き出すようにポツリポツリと語る。「作業を終えて帰る時、「被災者から、本当に助かりました、有り難かったです」と頭を下げて言われると、また来なくては、という思いが込み上げ



赤色の丸いシールを貼り、駆け付け付けたボランティアの出身地を都道府県別に表示した地図(柳原の災害ボランティアセンター)

てきて…。自己満足もあります。が」との答えが返ってきた。車で長野に来ていて、その後、長野駅では何回も顔を合わせることに。活動を長く続けていられるのは、自由業で比較的自由に動けるためという。結婚されているのかどうか聞き逃してしまっただが、妻帯者なら無理だろうと勝手に想像してこの件は不問に付した。それにしても100日間とはすごい。

また、この班には、市内の団地

から毎朝30分自転車をこいでやって来ていたIさん(65)がいた。この日で17回目という。温厚な人柄で落ち着いており、まさにリーダーに適役だった。大阪で生まれ、神奈川県で働いていた。仕事で来ていた長野が気に入ってから住んだという。山に登って花の写真を撮るのが若い頃からの趣味だと教えてくれた。退職して間もなく水害が発生。「これは神様が自分に与えてくれた使命だ」と思い、ボラ活動に加わったという。Iさんとは8回目も同じ班になった。

さらに、兵庫県西宮市から夜行バスを乗り継いでやって来たOさん(64)。11月に7日間ボラ活動をしており、今回は3日間行った。自動車関連部品会社で財務部長を務めており、今年退職を迎え

る。数年前に妻に先立たれ、子どもも独立していることから今は自由な生活を楽しんでいるという。信州の自然が特にお気に入り。帰りに、周辺の山々を眺めては「こちらに住みたいなあ」と盛んに話していた。どうぞ、第二の人生は信州で。

この回は6人編成で全員男性。床上浸水2メートルで全壊扱いの築20年の木造2階建ての住宅を担当する。床板を剥した後の柱や横木にこびり付いた泥をブラシや刷毛を使って取った。ガラス戸やテーブルの移動、石膏ボードの片付けの作業も。1階に10部屋もある大きな家。取り囲む塀も見事だったが、改修には時間がかかるのではと思った。

他県の被災地に比べて長野県に来るボランティアは多い。長野県が全国のほぼ中央に位置し、首都圏や関西からも近く、来やすいところがある。それに加え、「信州の自然が魅力的だから」という声を何人もの人から聞いた。この財産を大事にしなくては。

長野と同様に、台風19号で甚大な被害を受けた宮城県内陸部にあがる丸森町。福島県と接しているが交通の便が悪いうえに、宿泊場所が少なくボランティア確保に難儀したとされる。7回目に一緒になった東京の30代の派遣社員の女性も長野に入る前、丸森町に支援に行ってきたという。「長野とは違って、現地に行くまでも大変でしたよ」と話していた。

やはり長野は恵まれていると思つた。



## 信濃を旅した文人たち

### 久米正雄 く父を想うく



上田商工会議所敷地に建つ久米由太郎顕彰碑

大正文学を代表する作家・久米正雄は、明治24年、上田尋常高等小学校長・久米由太郎の次男として上田片平町（現上田市大手町）で生まれた。自宅は、上田城址公園と濠を挟んで向かい側に建つ、河合邸所有の借家だった。

満7歳の春、運命を変える事件が起こった。18年後、久米は、その出来事を主題にした小説『父の死』を執筆。その5年後に『不肖の子』を、さらにその4年後、自伝『吾が少年時代』を著した。この三作品を中心に、父の死に対して久米がどのように向き合っていたのか探ってみたい。

その年の春は、いつもの信州に似げない暖かい早春であった。私共の住んでいた上田の町裾を洗っている千曲川の河原には、小石の間から河原蓬がするすると芽を出し初めて、町の空を穏かな曲線で劃くぎっている太郎山は、もう紫に煙りかけていた。晴れた日が幾日も続いて乾いた春であった。（『父の死』）

叙情的な書き出しから一転、事件は起こった。

3月末の夜半、\*正雄はけたたましい半鐘によって起こされた。父が務める





上田商工会議所協道の案内板。焼失前の写真を掲示

小学校の\*女子部が燃えている！  
正雄の頭には、女学校の中央にある白亜の六角塔が浮かんだ。

\*作品では辰夫になっている。女子部は現在の商工会議所の場所にあった。

翌朝、焼け跡を訪れた正雄は、人々の話から、六角塔が瞬間に焼け落ち、階上に収めた御真影も焼けてしまった事を知った。「御真影を燃やしちや校長の責任になるのだろう」「命に代えても出さなくちやならないんじゃないのか」など、周囲から聞こえてくる話に不安な思いでいると、蒼白な顔をした父が校門から出てきた。正雄は、小さな声で「お父さん」と呼んでみた。父は一瞬不審そうな顔付きをしたが、何も答えずに連れの人と去って行ってしまった。やがて、家に戻った父はそのまま書齋に閉じ籠り、家中に緊迫した空気が流れた。

「坊ちゃん、大変です。翌々日、松平神社（現真田神社）で遊んでいた正雄は、下女に連れ戻された。父は左腹部に刀を立て、その返す刀で頸動脈を見事に断ち切ってしまうていた。母は、血に塗られた父の上半身を自分の膝の上に抱えて、全身で泣いていた！

人々は、「さすが武士の出だ！」と嘆賞したが、正雄にはどうしてそれが偉いのか解らなかつた。葬儀の日、葬列の先頭には楽隊がつき、正雄たちの後ろには長い列が続いた。沿道にもたくさんの人が居並び、涙で見送った。黒紋付の羽織を着た正雄は、出来るだけ威厳を



遊び場だった松平神社（現真田神社）

つくろいながら、父の死がもたらした思いがけない感動の中に浸っていた。「お父さんのようにえらくなるんですよ」。見知らぬ人が肩を叩いて言った。

以上が、『父の死』のあらましである。

葬儀が終わると、残された家族は母方の実家がある福島県安積郡桑野村に移住した。その地で高等小学校から安積中学校へと進んだ久米は、絵画・テニス・野球に熱中。教頭の西村雪人の指導で新傾向俳句を学び、三汀と号して脚光を浴びる。

明治43年、上京して第一高等学校文科に入学。芥川龍之介・菊池寛・松岡譲・山本有三らと同期だった。3年後、東京帝国大学英文科に入学すると、仲間たちと第三次「新思潮」を創刊。久米は戯曲「牛

乳屋の兄弟」を執筆、有楽座で上演されて好評を博した。芥川とは特に親しく、互いの作品をかなり意識し合っていた。この頃、共に夏目漱石の門下生になる。

大正5年、第四次「新思潮」創刊号に芥川が『鼻』を、久米が『父の死』を発表した。漱石は、芥川宛の手紙の中で『鼻』を激賞、「文壇で類のない作家になれます」と書き、「久米君のも面白かった。殊に事實だと云ふ話を聴いてゐたから、猶の事興味がありました。併し書き方や其他の點になると、あなたの方が申分なく行つてゐると思ひます」と書き添えた。手紙を見せられた久米は、芥川への嫉妬を抑えきれず、後年、その時の心情を小説『風と月』の中で回想している。

漱石の言葉通り、芥川は若くし

て作家としての地位を確立している。久米も次々と力作を発表、人氣作家への道を歩み始めた。

『父の死』は、正雄少年の視点で書かれていたが、30歳の時の作品『不肖の子』では、久米が持ち続けてきたある疑念に焦点が当てられた。

私は前にも言った通り、その当時幼なかつた。そして父の死因に対しても、そうなつた周囲の状況を見る事を知らなかつた。ただ、父が御真影を焼失してしまったのを済まないと思つて、その責任を重んじた結果自ら進んで、自殺して詫びたのだとだけしか考えなかつた。そして後で年をとつてから、その位の事で死ぬ気

になったのは、偏ひとへに武士道教育から出た虚栄で、死なずともいいものを 死んだとしか考えられなかった。 (『不肖の子』)

28歳の夏、久米はなりゆきで上田を訪れることになった。執筆と避暑を兼ねて上州の温泉へ赴いたが、どこも満室で断られてしまう。思い立って向かったのが別所温泉だった。花屋旅館に落ち着いた久米は四、五日もすると退屈して身を持って余してしまふ。そこで、上田の街を訪れる決心をして、昔、久米家の家主だった河合家に葉書を出した。薬局を営んでいる当主の河合操がすぐに訪ねてきて、心からの歓迎の意を表した。

数日後、数十年ぶりに上田の地を踏んだ久米は、河合家が営む薬

局を訪れ、思い出の地を案内してもらおう。かつて住んでいた家には、はつきりとした記憶はなかった。内部は、かなり手を入れてしまったという。

突然K氏に訊いた。「一体親父はどうして、自殺なんぞしたんですかねえ。何か止むに止まれぬ事情でもあったんでしょうか。」K氏は、雨戸を半ば繰った。薄暗い座敷の中で、私の方をじっと見返した。が、別に変った声音でもなく、

すぐこう言った。「ええ、まあ、そうですね。謂わば反対派の卑劣な非難のために、とうとうあんな事をなすったんです。」 (『不肖の子』)

当時、真の教育をめざして、改革しようとする父由太郎に対し、地元の教員の間から反対運動が起こっていた。そこにあいにく火事が起こって、御真影を焼失してしまつた。結局反対派の圧迫を受けて、とうとう自決をしなければならなくなつたというのだ。

父が単純な忠君愛国の責任観から、徒と為とに自殺し果てたのではない事は明白で、それは私のひそかに予期していた所だったに係らず、やっぱりその想像の破壊された事は、私



H28年河合邸は上田城跡周辺再開発により取り壊された

の心をちよつと不快にした。  
（『不肖の子』）

この後、久米は縁側に立つて中庭を眺めた。そこには昔と同じように霧島の躑躅の大株があった。すると、真つ白な花が咲いていた。幼児の頃の記憶がよみがえり、理由のない涙がそつとこみあげて来るのだった。

その夜に開かれた歓迎会には、覚えのある歯医者や眼科医、父に教えを受けたという女学校の校長など、地元の名士が集まった。小説や俳句の話の他、話題にのぼったのはやはり父についてだった。父親が尊敬されていることは明らかだったが、久米は純粹な気持ちで受け入れることができず、動揺を抑えられずにいた。

久米33歳の時の自伝『吾が少年

時代』には、自らの家系や幼児期の追憶などが描かれていて、『父の死』や『不肖の子』の背景を補い、理解を深める上でも意義深い作品といえる。

父由太郎は東京師範学校を卒業、明治7年に福島師範学校に赴任した。そこから長野に赴いた後、上田の高等小学校の校長として迎えられた。そこで生まれたのが正雄である。当時、家には、祖母、両親、父の弟二人に妹が一人、そして正雄の姉静子と兄哲夫がいた。

上田城址公園内の松平神社境内が唯一の遊び場だった。家の前の空濠を隔てた先には、監獄の土塀が連なっていた。現在、市立博物館が建っている所である。夕方になると、よく答つ音がして、それが聞こえてくると、正雄は門の前から立ち去ることが出来ずにいた。時々

垣間見える囚人たちの哀れな姿にも、子供心に憐れみのような気持ちを抱いていた。

父について覚えている事は、そう多くはない。よく職員室までお弁当を届けに行ったが、そこでの父は取りつく島がなかった事。たまに父に連れられて出掛けても、行った先で飲みだした父にほったらかしにされ、途方に暮れていた事。そして、衝撃的な死。

父の葬儀の後、福島から母方の祖父が迎えに来た。河合家などごく少数の人たちに見送られながら、上田に別れを告げる。

思えば父は、結局死なねばならぬ理由があつて、死んだのであろうが、自ら死ぬには死ぬだけの、感激も持っていないに違いない。そして実に

この両者を兼ねるものが、結局やっぱり人間なのだ。……まったく反対派の人たちも、殉じようとは思わなかったに違いない。死なれてみると、すべては感動で満たされた。父は御真影を焼失して、その申し訳に腹を切り、喉を突いて死んだ。—そう人々の口には言い伝えられ、私たちもそう信じた。もちろんそれだけではよすぎるが、私も子として、やっぱりその感動を、できるなら生かしたいように思う。(『吾が少年時代』)

『不肖の子』には、父がなぜ自殺しなければならなかったか、初めて問い質した後の複雑な心境が描かれていたが、ここでは微妙な変化がみられる。ただ、これもま

た本心ではなかっただろう。

小説家としての久米は、『受験生の手記』『蜚草』『破船』など、話題作を次々と発表。昭和に入ると、『月よりの使者』『沈丁花』など、多くの通俗小説を書いて流行作家となった。鎌倉ペンクラブ初代会長や鎌倉文庫の創設、文士劇やラジオへの出演など、文壇での交流や文化人としての活躍もめざましかった。昭和26年、久米は60歳で急逝する。

河合家には、昭和16年に上田で講演をした時の色紙が残されている。生家の跡地を訪れた折の句で、久米50歳であった。

わが生れし家はいつごとく落葉踏む

思えば久米は、父の死について問い続けながら、作家になつてい

たのではないだろうか。華やかな文士生活の陰で、心の奥底には無念の思いと追慕の情が、生涯にわたって秘められていたに違いない。

海野 郁

参考文献・Webサイト

『久米正雄作品集』岩波文庫2019

『長野県文学全集 第1巻明治編

〈I〉郷土出版社1989

『長野県文学全集 第2巻大正編

〈I〉郷土出版社1988

『長野県文学全集 第3巻大正編

〈II〉郷土出版社1988

『日本現代文学全集57 菊池寛・久

米正雄集』講談社1967

上田の「文芸」を支えた人々・久

米正雄

<https://museum.unic.jp/jinbutu/>

[data/009.html](https://museum.unic.jp/jinbutu/data/009.html)

## 森將軍塚古墳

善光寺平を一望できる千曲市杭瀬下にある標高 652 m の有明山。その北側中腹に鎮座するのが国指定史跡の森將軍塚古墳である。以前、有明山の直下を走る上信越自動車道を長野方面からの帰途、見上げた先に古墳が垣間見え、いつか全容を見てみたいと思っていた。



古墳全容

サクラやアンズが満開になった 4 月中旬、花見を兼ねて古墳見学に出かけた。しなの鉄道屋代駅から東に 1.5 キロほど、「科野の里<sup>しなの</sup>歴史公園」の中に古墳はある。広い公園の一角には森將軍塚古墳館と長野県立歴史館があるが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため閉館。しかし、戸外の竪穴住居

や高床式倉庫などが並ぶ「科野のクニ」だけでも十分に古代にタイムスリップできる。

開け放たれた竪穴住居を一戸ずつ覗き込む。外観内装ともすこぶるシンプルな構造で、当時の素朴な生活に思いをはせる。科野のクニを散策した後、矢印に沿って坂道を上り古墳に向かう。清風の中、春の日差しを浴びながら歩くのは気持ちがいい。ウォーキングコースになっているらしく、手ぶらで歩く人も多い。随所に設置されている図入り説明板を読みながら上ること 25 分、古墳に到着。

一帯は、起伏はあるものの手入れが行き届き、すがすがしい空間だ。中央に巨大な前方後円墳がでーんと横たわる。全長 100 m、長野県内最大で、国指定の史跡を実感する。後円墳の上は自由に歩くことができ、見学者が絶えない。方墳の方から上り、周囲の埴輪を観察しながら円墳へ。直径 40 m ほ



竪穴式住居



眼下を走る上信越自動車道

どはあろうか、広場のようだ。北側の端に立つと、残雪光る戸隠山や飯綱山、その西には北アルプスの山々が連なる。お墓の上にいることを忘れて、眺望絶佳に思わず深呼吸。眼下には田園風景の中、上信越自動車道と北陸新幹線の高架が走り、車両が忙しく行き交う。車中から幾度も

見上げた古墳から、きょうはパノラマを楽しむ。

説明板によると、この古墳は古くから森將軍塚古墳と呼ばれているが、実のところ主の名前などはわかっていない。当時の科野のクニを治めていた王と考えられているが、周囲を取り囲む 157 個の埴輪が権力の大きさを物語る。

古墳が作られた 1600 年前から現代までをつぶさに見てきた古墳の主。その変遷を、人々の営みの移り変わりを、どう思っているだろうか。

令和 2 年 4 月 16 日訪問 伊藤文字

## 信州国際音楽村のバラ園

「音楽村のバラ園を見たことがありますか」そう聞かれたのはどれくらい前のことだったでしょう？ 上田市生田の小高い丘にある信州国際音楽村は、水仙やラベンダーが有名です。以前見た丘一面に咲き誇る水仙は、それは見事でした。でもバラ園は見たことがなく、どこに植えられているのだろうと気になっていましたが、今回ようやく訪れることができました。



イングリッシュローズガーデン



梅雨入りした信州もその日は前線が一休み、日差しの強い日でした。公園内の散策、鑑賞はご自由にとのこと。駐車場にはバラ園を案内する看板があり、屋内ホール「こだま」の裏道を下ります。すぐ右側に野外パノラマステージ「ひびき」があり、しばらく使用されていないガラとした空洞がひっそりと佇んでいました。また以前のようにコンサートが開催されることを祈りながら、さらに坂道を下ります。こんな奥まで来たのは初めて!!

目の前に浅間山とその裾野に広がる東御市の街並みが飛び込んできました。なんて気持ちのいい景色!! すると、そこには色とりどりのバラが植えられた素敵な庭が広がっていました。この日は大勢の方が手入れをしていて、思い切って声をかけたところ興味深いお話を聞くことができました。今回はそんな素敵な庭の紹介です。

今年は新型コロナウイルス感染症対策のため、例年行われている「春のぼらまつり」は開催中止になったとのこと。「丹精込めて育てた庭をお見せできず、とても辛かった」と話されたのは、今年で10年目となる「信州国際音楽村公園 バラの会」の副会長・大平喜代子さん。地元の約40名の会員と参加会員が約30名、他にもオーナーさんや里親さんがかかわっていて、そのうち30名程が実際に作業しています。

この会は、バラだけでなく花が大好きな人たちの集まりでみなボランティアです。目標はバラ園ではなくイングリッシュガーデン!! バラだけの庭も迫力がありますが、素晴らしい眺望とイングリッシュローズを始めとするバラに似合ういろいろな草花たちが共演する心癒される庭造りを目指しています。

現在はソーシャルディスタンスを守りながら5月から作業を始めていますが、日々生長する植物が相手なので大変だと言います。また、こぼれ種や株分けして増えた草花など、自然が作



作業する会員さんたち

り出す庭の表情は毎年違い、今眺めている庭の形は今年しか見ることができない特別な風景だと強調されました。

今年おすすめだったのは、公園を下っていくと左側に見えるミックスガーデン。バラはもちろん真白なオルラヤやラムズイヤー、アグロステンマ、矢車草などなど可愛らしい花たちが勢ぞろいした花畑です。会発足当初から手がけている庭で、この10年間で最高の景色だったそうです。「こんなに素敵に仕上がったのに、多くの人に見てもらえなくて残念。本当にかっかりだった」と肩を落とす姿に何とも言えない気持ちになりました。それでも、「この庭の一番下のガーデンアーチから見上げる風景は最高だから是非見て行って」と嬉しそうに教えてくれました。



昨年までは、里親として一株を担当し一年を通して育て方を教わる教室などいろいろな講座が開催されました。中でも、大阪からイングリッシュローズで有名なデビットオースチンローズ社よりバラの専門家を招いた講演会や講習会は30回にも及びました。2011年東日本大震災の時には、震災のお見舞いとして304株のイングリッシュローズが寄贈され、そのうち104株は現在このガーデンですくすく育っています。あとの200株は東北へ贈られ、その多くは石巻市の奇跡のガーデン「雄勝ローズファクトリーガーデン」へ、他は仮設住宅の庭で育っているそうです。

音楽村では長野に避難してきた方たちへ向けたコンサートなど支援活動も盛んで、大平さんたちも心のこもった大切なバラを枯らすわけにいかないと一生懸命だったとのこと。

純粋に花が大好きな人たちが集まり、心を込めて庭造りを続けている。このバラ園の生い立ちとエピソードを聞いて、あらためて園内を見渡すと一段と素敵に見えました。これから最盛期を迎える夏の草花や二番花のバラなどは秋まで楽しめます。ぜひ訪れてみてください。

6月16日訪問 望月聡子

※現在約150種、約750株のバラが植えられている。

バラ以外の花は約350種類。

## 設立の経過、そのコンセプト、今後の展望



NPO法人上田図書館倶楽部副理事長  
宮下明彦

### 1. 上田図書館倶楽部設立の経過と熱気に溢れた発足

#### (1) 背景

上田市では図書館の電算化の時代を迎えると、これまでの読書指導的な図書館長では電算化や議会対応が出来ないとみなされ、平成に入ると図書館長は行政職員が任命される時代に移りました。

しかし、人事異動で図書館に配属された行政職員がいきなり図書館の専門性の高い業務を担うのは無理で、予算や人事、施設管理に専ら当たり、数年経つと異動していくことが常態化していきます。

一方、図書館司書の資格を取る若者が多数存在します。また、市民の中には図書館に関わりた

い、学びたい、活動したいと思っている方がかなりいます。

平成10年代に入ると、図書館運営のあり方として、従来のように公務員が独占的に図書館を管理運営するのではなく、市民が参画し、学習活動、文化活動を自ら企画立案し運営する公民協働、市民協働の考え方が台頭してきます。

図書館長であった私も、市民に依拠し、活躍の場を提供し、適正な対価を支払うことによつて専門性の向上、持続的なサービス、人材育成、意欲と能力の再生産が可能なのではないかと考えるようになりました。

そして、平成13年度(2001)上田市実施計画に「市民参加型図書館づくり」を提案し採択されました。この提案は平成

14年度（2002）に上田市実  
施計画の上位にランクされ、上田  
情報ライブラリー運営基本計画に  
「サービスを高いレベルで維持し  
ていくため、専門性が高く意欲的  
なNPOやボランティアが市と連  
携、協働して運営に当たる」と定  
められ、開館を翌春に控えた平成  
15年度（2003）に至り実施計  
画に基づき委託料100万円の予  
算措置がなされました。

#### （2）熱気に溢れた発足

平成15年度（2003）に入  
ると、上田駅前には駅前再開発ビル  
が姿を現して、市民の中にはその  
再開発ビルに開設される上田情報  
ライブラリーに対する関心が急速  
に高まってきました。

そこで、その年の9月から11月  
にかけて「図書館職員による公開  
講座」を開催しました。参加者は



上田情報ライブラリー開館式典

少ないだろうと思って始めました  
が当日になると、会場の市立図書  
館2階会議室は受講者で一杯でし  
た。一日の仕事を終えた夕食時に  
もかかわらず、毎回70人、80人と  
多くの受講者で溢れました。受講  
者の中には来春開館する上田情報

ライブラリーで働きたい、ボラン  
ティアをしたい、図書館について学  
びたいなど様々な思いの市民が受  
講していました。この状況を目の  
当たりにして私は市民参加型図書  
館づくりが可能だと思い、NPO  
の市民団体が生まれることを確信  
しました。

そして、平成15年（2003）  
11月に講座受講者や図書館協議会  
委員、図書館職員が中心になって  
設立準備会を設置し、会則、会費  
役員、事業活動計画等を検討する  
とともに、名称を「上田図書館俱  
楽部」と決定し、趣意書をつくり  
広く市民に参加を呼び掛けたので  
した。

平成16年（2004）1月18日  
に設立総会を開催し米津さんが会  
長に就任されました。来賓として  
母袋市長も出席され、上田図書館

倶楽部への期待を表明しました。

こうして、上田情報ライブラリー運営のパートナー、市民協働のモデルとしてNPO 上田図書館倶楽部が熱気に溢れて発足しました。

## 2. 上田情報ライブラリーのコンセプト

コンセプトは①暮らしとビジネス支援②千曲川地域文化の創造と発信③市民協働の図書館づくりですが、これらのコンセプトが出来た背景、経過について述べます。

2006年に文科省の諮問機関、これからの図書館の在り方検討協力者会議は「これからの図書館像―地域を支える情報拠点をめざして(報告)」を提言します。ここでは、図書館は本の貸出に拘るのでなく、課題解決型という新しい

タイプの図書館像を指し示しました。これまでの文化教養型図書館とは違い、日常生活や仕事、医療等の課題解決に役立つ情報提供を目指す新しい図書館です。

この背景には、戦後の図書館の在り方の歴史がありました。現在も図書館サービスの基盤は貸出ですが、貸出が日本の図書館で一般化したのは昭和40年代からで、それ以降、貸出の多い図書館が良い図書館と認識され全国の図書館は貸出競争にしのぎを削っていました。しかし、平成時代に入ると図

書館のこのような在り方が本が売れない原因だとして作家、出版界、書店から多くの批判が出されて、日本の図書館界は自信を失い暗中模索をしていました。

そんな中、菅谷明子さんが1999年8月号の中央公論紙上

に「進化するニューヨーク公共図書館という大変注目されるレポートを発表しました。菅谷さんは長くアメリカに滞在してジャーナリスト、フリーランスのレポーターとして活躍し、ニューヨーク公共図書館をヘビーユーザーとして利用していました。時々日本に帰ったときに見る日本の図書館との違い、大きな落差に気づきニューヨーク公共図書館の姿を日本に伝えたのでした。この菅谷レポートが日本の図書館界に大きな衝撃を与えました。

菅谷さんは更に2003年9月に岩波新書で『未来をつくる図書館』を書き詳しくニューヨークからの報告をしました。今、その目次を列挙すれば、第1章新しいビジネスを芽吹かせる。第2章芸術を支え、育てる。第3章市民と地



域の活力源。第4章図書館運営の舞台裏。第5章インターネット時代に問われる役割となっています。

上田駅前新しい図書館を創ろうと、これからのあるべき図書館像を模索していた私は新しい図書館像はこれだと確信したことを思い出します。これが、第1のコンセプト「暮らしとビジネス支援」と表現されることとなります。

上田市立図書館では、毎月第二土曜日に黒坂周平先生が常任講師を務めていた新上田自由大学が開講されていました。講座の日には図書館の応接室で黒坂先生から話を伺うとともに、上田駅前に新しい図書館を創りたいという私の話にも熱心に耳を傾けてくれました。そんな中、平成14年11月の初旬、黒坂先生から電話があり、駅前図

書館について命をかけるつもりで一生懸命に取り組むように激励があり、その直後、黒坂周平先生は母袋市長はじめ市理事者に是非駅前図書館を実現してほしいと熱弁を振るわれたのでした。

その要旨は、上田は奈良・鎌倉時代の昔から信濃の中心地として栄えたところであり、これからも東北信の核として文化発展の中心な役割を果たすべきで、上田駅前に図書館を創り、貸出をはじめ、活発に講座や講演会、コンサート等を行えば、小諸や軽井沢からも更埴地域、長野市・北信地域からも人々がしなの鉄道を使って駅前図書館のある上田市に足を運ぶことになり、上田市は文化的中心として大きな役割を果たすことができるというものでした。

後にこの地域を千曲川地域と呼

び、第2のコンセプトが「千曲川地域文化の創造と発信」と名付けられたのでした。

三つ目のコンセプト、「市民協働の図書館づくり」は上述のNPO上田図書館倶楽部成立の背景で述べた経過から至極当然に生まれたものでした。

このような経過から三つのコンセプトは生まれ、上田情報ライブラリー開館とともに定着していくこととなります。

### 3. 今後の展望

NPO法人上田図書館倶楽部は今15年を経過し新たな時代を迎えています。有名な上田自由大学は大正時代中頃に成立して昭和初期には衰退していきましたが、その期間は約10年であったことを想

えば、この15年はかなりの重みを感じます。

同時に、これからの将来を展望することも大事で、そのために3点提言してこの寄稿のまとめとしたいと思います。

### (1) 継続は力なり

上述したようなNPO上田図書館倶楽部発足の頃の熱気をこれから期待することは難しいと思いますが、軌道に乗っている各種活動、事業を継続していくことが一番重要でしょう。継続は力なりという格言を今かみしめたいと思います。

### (2) 財政基盤の充実

NPO法人として発足当時から意識してきたことですが、やはり維持継続していくためには財政基

盤の充実が大事だと思います。

収入として会費収入は基本ですが財政基盤としては貧弱です。当倶楽部の人的資源・能力を活用しながら、各種受託事業を開拓していくことが重要でしょう。

新たに開発する受託事業として、上田市の元気づくり支援金や長野県の支援金の活用、図書館振興財団助成事業とか文化庁助成事業等に積極的にチャレンジしてみてもどうでしょうか。

また、コロナ禍を契機にこれからデジタルアーカイブとか、オンライン授業、ユーチューブ、ZOOM等のICT情報活用時代が本格化して来るでしょう。

その際、図書館や学校、企業、家庭でこれらのサポート役が求められてきます。図書館倶楽部はこれらに参入できないでしょうか。

一方、コロナ禍で移動自粛をしている中で、改めて読書の楽しみ、重要さを感じた方も多いと思います。文学とか歴史、生活について学びたいという欲求に応じて各種講座、コンサート等の展開も引き続き必要だと思います。

### (3) 活動の魅力を伝える広報活動

そして、これらの活動、事業の魅力積極的に発信していくことも大事です。現在のホームページ、情報紙「とく」、電子ジャーナル「環」はじめ、新聞やマスコミの利用等、広報活動も今まで以上に展開し、図書館倶楽部の魅力を伝え、若い方の参加への道に繋げたいと思います。



## 波紋

「環」24号から4回にわたって、「自然を友に信州の日々を樂しむ」と題して、手作り天文台やカラスの罫かまぼこの話などの寄稿をいただいた長野市在住の山口登さん（79歳）。山口さんは県内の農業高校で林業担当の教員を長年務めた後、森林NPOの活動に関わり、2013年から木曾町にある木曾山林資料館の学芸員として働く。資料館は明治34年に日本で初めての林業科を持つ実業高校として誕生した木曾山林高校の108年間の記録、主に器械・用具・標本・写真・図書などを展示している。

山口さんには30号の「躍働」にも登場していただき、資料館の経緯や現状、多彩なキャリアなどを紹介した。その際、インタビュ어의最後に、「これからやりたいことは？」とお聞きしたところ、「資料館の資料を整理して台帳に記録し、個々の資料の故事来歴を調べて基本台帳に記載するという気の遠くなるような作業に取り組みたいと思っています。エネルギーが尽きるまでライフワークとして」とのお答えがあった。

2年前に語っていたその決意を遂に実現、今年3月、『木曾山林



研究紀要第1号表紙

資料館研究紀要・第一号』を発行した。第一号は資料館所蔵の明治・大正期の林業関係の写真の故事来歴を多角的に調査したものがメインとなっている。既に第二号に向けて取り組み始めた山口さんに、第一号発行までの思い、ご苦労などをメールにてインタビューした。

**Q** どんな思いで取り組まれましたか。

**A** 建築物や美術・工芸品等は、何の説明もなしに見る人に感動を与えることが可能ですが、当館で所蔵している古い測量器具や山道具・写真等々は何のためにそこにあるのか、いつ、誰が持ち込んだのかなど、見る人に何も伝わらないことがほとんどです。

それを解決するためには、収蔵資料の故事来歴を明らかにするこ

とが必要で。これまで、資料の選  
び出しと保存手立て、登録という基  
礎的な第一段階の仕事に追われてい  
て、なかなか落ち着いて調査をする  
余裕がなかったのですが、この1年  
はそれに取り組むことができました。

Q どのように調査されたので  
すか。

A 今回、研究紀要に掲載した  
論文は、卒業生から寄贈されたと  
推測される古い写真についての故事  
来歴調査がメインになっていますが、  
残されている『校友會報』や同窓  
会が所有している記録等を丹念に  
調べて、およその年代と寄贈者が  
明らかになったところで、関連する  
周辺資料をネット等で探していき  
ました。近年、急速に明治時代の  
いろいろな文書や書物がデジタル  
データとしてネット上に出てきたこ  
とが幸いしました。

その中で特別なことという  
論文執筆の中心になっている中畑  
孝史氏（当館スタッフ）が絵葉書の  
コレクターで、林業関係の絵葉書  
の収集作業の中から、当館所蔵の  
古い写真と同一とか類似の写真（絵  
葉書）を探し出すことにより、所  
蔵写真のアリバイ（？）が確認さ  
れてきました。この手法は他に例  
をみないユニークなものです。

Q 第一号を発行された今、ど  
んなお気持ちですか。

A 研究紀要が発行されて、た  
んなる昔の懐かしいモノが展示さ  
れているだけの資料館が、林業な  
らびに林業教育の歴史を研究し、  
それを後世に伝えていくという使  
命を目標に掲げている施設である  
ことが、世間に認知されるキッカ  
ケになれば大変うれしいというの  
が、今の気持ちです。

Q これからのご予定、方針な  
どをお聞かせください。

A この研究紀要を第1号で終  
わらせることなく、毎年継続して  
発行し、新しい知見を増やしてい  
くことが次なる目標ですが、少な  
くとも現在のスタッフで10号までは  
出したいと思っています。ですが、  
スタッフの高齢化が進み、私自身  
の命の火が消えてしまわなければ  
の話です。

資料館は木曾川  
沿いの山林に囲まれ  
た静かな村里に建つ。  
小鳥のさえずりと爽  
やかな川音の中、林  
業と林業教育の歴史  
が少しずつ紐解かれ  
ていく。

（伊藤文子）

木曾山林資料館ホームページ

研究紀要第一号

[http://kisanrin1901.org/  
wp-content/uploads/2020/03/  
kisanrinrb010000.pdf](http://kisanrin1901.org/wp-content/uploads/2020/03/kisanrinrb010000.pdf)

寄稿

## 暗闇を守る

もぎりのやぎちゃん

(やぎかなこ)

映画館とはなんだろうか。そんな疑問がこの2ヶ月近く頭の中で浮いたり沈んだりしている。新型コロナウイルス。外出自粛。3密を避ける。新しい生活様式。数ヶ月前とは激変した世界。それ以前から映画館、特にミニシアターは厳しい状況にあった。Amazon、プライムやNetflixなどに代表される動画配信サービスの台頭。そこに追い討ちをかけるようにやってきた新型コロナウイルス。風前の灯とはこのことだ。そんな状況の中で映画の灯を消すものと立ち上がった人達がいる。「ミニシアター・エ

イド基金」映画監督の深田晃司さんと濱口竜介さんが発起人のプロジェクトだ。この基金はクラウドファンディングとして支援を募り、参加劇場に集まった支援金を分配するという仕組みだ。当初の目標であった1億円はわずか3日で達成し、最終的には約3万人の支援者と3億円以上の支援が集まった。1団体あたり約300万円が分配される。映画館じゃなくても映画が楽しめるこの時代に、これだけの支援が集まったことにひとりの映画館スタッフとして心が震えた。そして同時に言い様のない違和感を覚えた。その違和感の正体に気付いたのは上田映劇の再開初日だった。

も例外ではなく4月9日から5月31日まで休館した。休館中はオリジナルグッズを作り、オンラインで販売するなど映画上映以外の収入について検討・導入した。お客様と会うことも、お話しすることもない日々。それでもミニシアター・エイド基金やグッズの購入を通して、多くの方から応援の気持ちを受け取っていた。そして6月1日、約2ヶ月ぶりに上田映劇は上映を再開した。お客様はいらっしゃるだろうか……。そわそわしながら扉を開ける。「いらっしやいませ！ おはようございますー！」

顔馴染みのお客様たちが入ってくる。多くはない、でも、いつも通りの客足。ブザーが鳴り、映画が始まる。事務所で作業をしながら映画が終わるのを待つ。上映終了後、劇場から出てきたお客様た

ちの顔は心なしか綻んでいた。「どうでした？」と聞くと目を潤ませながら「良かった……」とお客様。そして「……居場所がひとつ、戻ってきたみたい」と続けた。私はその言葉にキュッと胸を掴まれた。映画館は単に映画を上映する^場所Vではない、かけがえのない^居場所Vなのだ。私はずっと抱いていた違和感の正体にやっと気が付いた。顔が見えなかったのだ。ミニシアター・エイド基金に支援し



てくださった人々の顔が。3億円、約3万人、あまりにも膨大すぎる数に輪郭がぼやけてしまっていた。「居場所が戻ってきた」と話すお客様の顔を見て思った。支援してくださった方の多くが映画館を居場所だと思っているのではないだろうか。きっと、そうに違いないと。

映画館は居場所だ。ただ映画を観るだけの場所ではない。言葉を交わさなくても、見知らぬ誰かと同じ時間、同じ場所、同じ映画を共有する。明るすぎる日常の中で、あえて暗闇に身を委ねる特殊な居場所だ。でも、その暗闇が誰かの心に寄り添うことを私は知っている。だからこそ、私はこの暗闇に映画の灯をともしていきたい。誰かの居場所を、居場所である映画館を守っていききたいと襟を正した。

日の出とともに神秘的な光景が生まれる山田池周辺



## あとがき

上田市常田に「信州元気塾」という、リサイクル事業で障がい者の自立を支援している特定非営利活動法人がある。パソコンやスマホ、ゲーム機器などを解体して、レアメタルや金、鉄、アルミなどの有用金属を取り出し、分別して資源化する。排出物のリサイクル率向上と障がい者の雇用機会拡充を目指す。事業所は常田と大屋にあり、それぞれ12人と6人が通所し、作業に当たる。

2月下旬、不要になったパソコンを常田事業所に持ち込んだ。駐車場に車を停めるや否や、スタッフが走り寄ってきてパソコンを運び出してくれた。ていねいな対応に恐縮しながら「預かり証」に記入していると、若い通所者が明るい声で「こんにちは」と声をかけてくれる。こちらも思わず明るい声で「こんにちは」。元気塾は畑で野菜も育てている。長ネギやカボチャ、サツマイモ、ジャガイモなど。その名も「元気畑」。

古いパソコンが山積みになっている作業所の隣で、施設長の栗本一生さんに話を聞いた。「納期がないので通所者がそれぞれのペースで作業できる。それが元気塾の趣旨に合っていて、無理なく続けられる」と。

ほんの20分ほどの滞在だったが、スタッフの爽やかな態度、通所者の明るい表情が印象に残り、「元気塾」の元気を感じた。（ふみ）

信州元気塾のホームページ <http://www.shinshugenkijuku.jp/>

---

<sup>KAN</sup>  
環 千曲川地域のひと文化を紡ぐ

第39号 空蝉 2020年7月発行

NPO 法人上田図書館倶楽部 <http://ueda.zuku.jp/>

電話/FAX 0268-25-3115 info@zuku.jp

---

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます。

環スタッフ：

伊藤文子 海野 郁 西入幸代 宮下明彦 望月聡子  
矢幡正夫 吉澤茉帆



電子ジャーナル「環」は、NPO法人図書館倶楽部の活動の一環として発行しており、千曲川地域の文化を通して人と人、人と地域をリングのように結び、文化とコミュニケーションの環を広げていくことを目的にしています。NPO法人上田図書館倶楽部は、図書館との協働による学習活動や情報サービス活動、文化活動などを行っています。また、図書館業務や関連業務を上田市から受託して、市民参加による幅広い図書館サービスを行い、地域文化の発展に寄与することを目的としています。